

平成23年度 へき地校体験実習 事後アンケート

実施者：北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター へき地教育研究支援部門

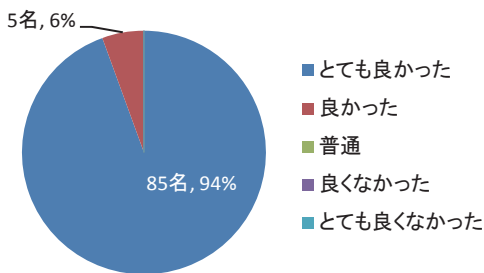
実施形式：直前指導もしくは実習手帳提出時に配布

実施期間：平成23年9月～11月

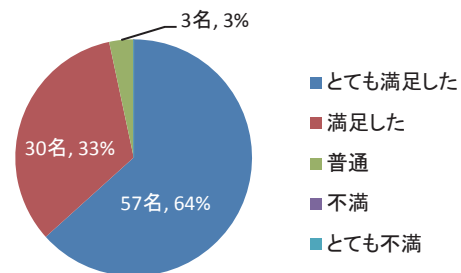
対象者：102名（札幌・旭川・釧路校 へき地校体験実習〔夏期〕履修生）

回答者：90名（回答率88.2%）

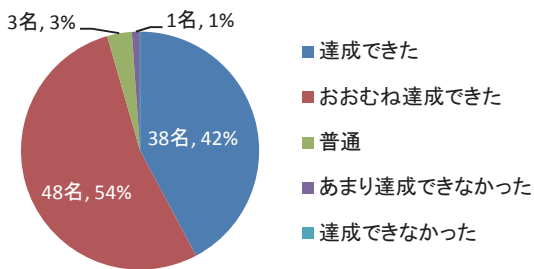
1. 今回の実習に参加してよかったか



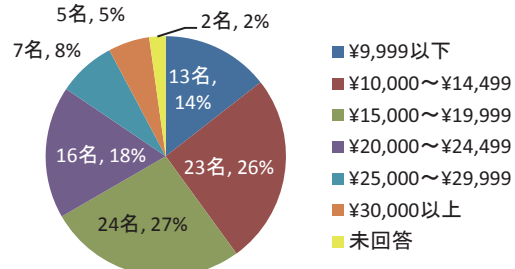
2. 実習の満足度は



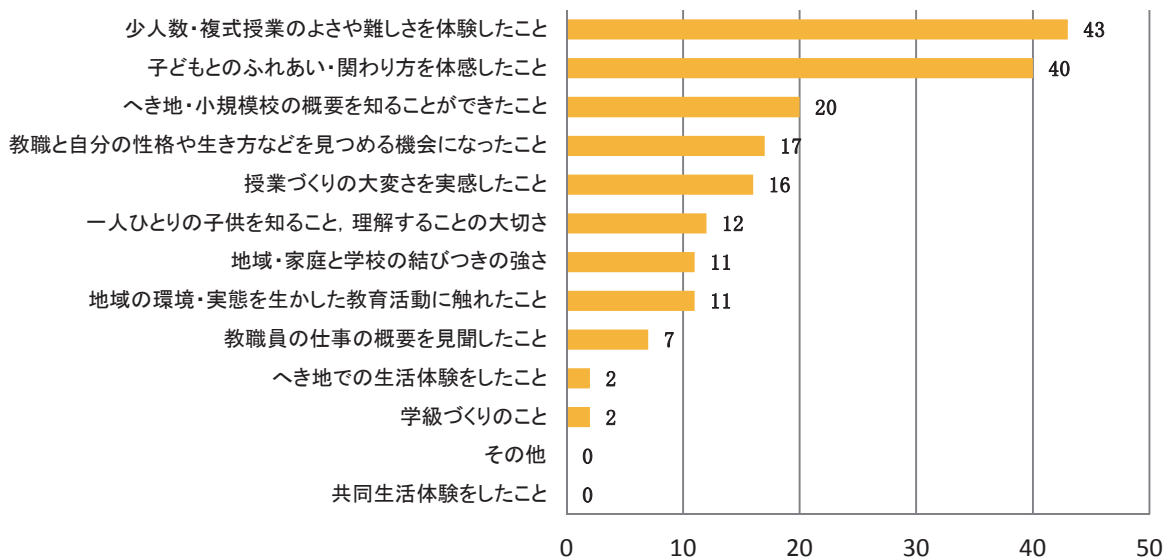
3. この実習で学びたかったことに対する達成度



4. 実習経費



5. 今回の実習においてもっとも大きな成果・学んだこと・感じたことなど（1人2項目回答）



* 質問1～3については5段階評価

6. 実習を終えた感想

- ・短い期間でしたが、実習で得たものはたくさんある。教師になってまた戻ってきたいという気持ちになった。今回の実習を思い出してこれからの大学生活に生かしていきたい。
- ・1日1日がとても楽しく、勉強になることであふれていた。実習に行けて本当に良かった。これから幅広く勉強していかななくては、と思った。
- ・子どもたちとたくさん遊んで、学んで、教壇体験もさせていただくという忙しい毎日でしたが、1日1日が経験の場であった。教壇体験では子どもたちも一生けん命こちらに協力してくれる姿勢でありうれしく感じた。しかし子どもの協力に頼ったりせず、子どもが参加したくなるような授業を作るのは大変難しい。
- ・子供たちと話すことの大変さに改めて気付かされた。
- ・児童との関わり方、現場の教員が子供たちに対して抱いている思い、仕事内容、自分の適性など、本当に多くのことを学べた。教師になりたいという気持ちが高まった。今やるべきことがたくさんあることに気づけた。
- ・子供たちが素直で元気。疲れていることを忘れるくらい楽しく感じた。
- ・へき地校という場で、教育活動をするにますます興味が沸いてきた。「子どもが大好きだ」という原点に戻ることができ、「教師になりたい」と改めて思った。
- ・素直で明るい子供たちと触れ合い、教師になりたい気持ちを再確認する良い機会になった。
- ・へき地校で勤務することは、生活するのは大変だと思う。校務も多い。しかし生徒1人ひとりを大切に、実態にあった教材、教授法を考えることができる。
- ・子どもたちは素直で優しい子ばかり。中学生ともなるとふてくされたりするが、そんな子は一人もいなかった。先生も親身に指導くださった。
- ・楽しさもあり、つらさもあり、疲れもある実習だったが、改めて教師という仕事について考えることができた。
- ・移動中、車から見える景色を見ているとどんどん不安になった。しかし子どもたちに会ってみるとそんな不安は消え、とても楽しい5日間だった。毎日元気をもらっているような気持ちだった。
- ・目的意識をしっかりと持っていたので、多くのことを学ぶことができた。
- ・何事も一生懸命にやる子どもばかりで、ああいった環境を数多く持つ北海道の風土を誇りに思うとともに、地域に根ざした教育の素晴らしさを改めて実感した。
- ・毎日が楽しいことの発見で、日に日に子どもたちと仲良くなれた。先生方や地域の方々から多くのことを学ぶことができた。
- ・短い間でしたが、生徒たちの成長をしっかりと肌で感じることができ充実した実習。美しい自然やよくくださった先生、宿泊先の方々、地域の方や生徒たちと触れ合い、人の温かさやひたむきさを感じることができ、改めて、人を育てたいという気持ちが高まりました。
- ・不安でいっぱいでした。しかし大変充実した実習となり、満足しています。自分自身成長することができたので、これからの大学生活に学んだことを活かしていきたい。
- ・毎日大変充実していて、まだまだ未熟な私ですが、少しは成長できた。行けて本当に良かった。
- ・素晴らしい、児童／先生方／地域の方々に出会えました。「自信を持って中学校へ送り出せる6年生にしたい」という気持ちが教師として一番大切なことなのだと感じた。
- ・素直な子どもたち、尊敬する先生方、温かい地域の人…とにかく人との出会いに感謝しています。
- ・生徒一人ひとりにメッセージを書いた色紙をプレゼントしたら、泣いてくれた生徒がいました。その生徒に「先生、私絶対先生になります」と言われたのがすごく嬉しかった。
- ・短い間だったが、これからの生かすことのできることをたくさん学べた。いっぱい話しかけてきてくれた子どもたちに救われた部分はとても多いです。
- ・子どもたちが素直で、とにかくかわいくて、ますます教員になりたいという気持ちが強くなった。
- ・直後の疲労感はとても大きいですが、そのぶん得たものは大きい。
- ・教師としての楽しさと同時に難しさも実感した。
- ・実習で自分自身と手も成長できたように感じる。子どもたちと触れあうことにより、教師になりたいという思いがさらに強くなった。もっと知識をつけていきたい。
- ・見本にしたいと思える先生がたくさんいらした。地域のお祭りにも参加し、村の特徴を知ることもできたし、何よ

- り地域に住む方々が私たちをととても温かく迎え入れてくださることが嬉しかった。
- ・子どもたちの元気な姿から毎日パワーをもらっていました。
- ・充実した5日間だった。教師という仕事をしっかりと感じる事ができた。
- ・毎日が課題の発見で、視野が広がった。
- ・貴重な体験。新たな発見をしたり、狭くなってしまっていた自分の教育に対する視野を広くすることもできた。地域と学校のつながりや、笹川の皆さんの温かさを実感した。
- ・先生やってみたい、と改めて思いました。楽しいことをたくさん吸収できるし、社会人になれば当たり前のことでも学べたし、自分が一歩成長できた。
- ・人として一つ成長することができたと感じる。いままで教育をするということも意味や指導の視野が狭くなってしまっていた。実習で新しい刺激をたくさん受け、教育や学校というものに対して新しい考え方を自分の中に取り込むことができた。
- ・なんとなく教師になる道を進んでしまった私ですが、今回の実習を通して、教師の魅力を大いに感じました。
- ・先生たちの思いやり、子どもたちの思いやり、地域の方々の思いやりが本当に嬉しかった。
- ・自分の中の「へき地校」に対するステレオタイプなイメージを、良くも悪くも崩された。今後に生かしたい。
- ・抽選漏れしてしまった人にはとても悪いなと思ったが、私は自分の夢が分からず、ただ対人援助職につきたいと考えるばかりで、なにも行動できていなかった。できれば今年中にはある程度の将来像を作りたいと思い、参加した。でも参加してみて「悪いなあ」という感情はすべてなくなった。それは引け目を感じないくらいの成果をつかむことができたからである。
- ・本当に、実習が終わってほしくないと思った。そして心から教師になりたいと思った。先生方の優しさに触れ感動すると同時に、教員の難しさを感じた。生徒と教員の境目をつけるのが難しかった。
- ・都市部と地方での教育のそれぞれの長所や短所などを知り、それぞれの教育の限界を越えていくにはどうしたらよいかを考えるきっかけとなった。
- ・勤務するならこういうへき地校にぜひ赴任したいと思った。協力して生活することって大事だと改めて感じた。
- ・自然に囲まれている場所で育ってきた子どもたちなので、自分よりも自然について知っている子もいて、驚かされました。
- ・5日間は本当に学びの多い、充実したものだった。大学4年生のこの時期に行くことができて、自分の課題を見つける良い機会ともなりました。
- ・自分は時間管理がへたくそで、余裕をもった行動ができなかった。何事も早め早めにやらなければならないことを実感した。
- ・現場の先生が、本当に子供のことをしっかり考えていることが分かった。
- ・教職員の方が職員室でどのような仕事をしているのかを初めてみる事ができました。
- ・短い期間の中で、泣いたり笑ったり怒ったり、いろいろな経験をして、いろいろなことを学ぶことができた。
- ・子どものことを真剣に考えるってこういうことなんだなと思いました。生活全体が子どものことで、肉体的には厳しかったが、本当に楽しかった。
- ・子どもを目の前にして、授業することの難しさ、子どもたちとの関わり合いの中で多くのものをもらいました。小規模校ならではの人の温かさ。
- ・新しい課題や目標が見つかり、とてもよかった。2年生のこの時期にやれたのはその後の大学生活が有意義になると思いました。自分の専攻以外にも勉強したいと思うことが多く見つかった。
- ・さまざまな人たちの協力があって、無事終えられたと思った。人の優しさ温かさを強く感じた。
- ・教師ってどのようなものなのかということが何となくわかった。ただ自分にできないことが多く戸惑うこともたくさんあった。今後たくさん勉強したいと思った。
- ・教師になりたいという気持ちが強まっただけでなく、今後の自分自身の課題も見えた。
- ・子どもとの関係が授業に直結すると感じた。

7. 実習中特に指導を受けたことはどのようなことでしたか

- ・板書計画の大切さ。保護者、地域の方々との関わり方。

- ・指導案に時間をかけるよりも、イメージトレーニングや授業の数をこなして数に慣れること。子どもと遊びまわるための体力を回復させること。
- ・へき地の特性は、児童数が少ないことであるため、全員理解できるような授業をするように心がける。
- ・目標を持って実習を過ごしなさい。実習生というよりはボランティアとして子どもたちと積極的に関わっていきなさい。子どもと目線を合わせて話をしなさい。
- ・もっと子どもの発言から授業を進めていくということができると、よりよくなるというアドバイスをいただきました。
- ・自分が何を分かってもらいたいかをはっきりさせること。子どもにちゃんと内容が伝わっているかよく確認すること。自信を持ってやること。
- ・子どもたち一人一人の授業進度に気を配りながら授業を行うこと。進度差に対応するために事前に準備を多めにしておくことが大切だということ。言葉の選び方には自分が思うよりも気をつけたほうがいいこと（気づかぬうちに難しい言葉を使ってしまっている）。
- ・とにかく子どもとたくさん遊んでほしい。
- ・言葉遣いと目線の高さ。
- ・実習手帳に書き込む内容や言葉遣いを注意された。事実だけではなく、感じたことや学んだことを必ず書きくわえること。話し言葉と書き言葉を混同していることなど未熟さを反省した。
- ・ただ知識／理解だけの学習にするのではなく、活動を盛り込むことで子どもたちの学びが深まる。子どもたちが自分たちで学習を進めていくことができおり、話し合いなどの活動がとてもスムーズだった。
- ・他学年の授業を参観するときは、前日までに担当の先生にあいさつをすること。とにかく子供たちとたくさん触れ合うこと。
- ・児童など、人の名前を書くときは絶対に間違えないこと。
- ・配布資料の日付や名前にはとくに注意を払うこと。字を書くとき、左手をそえる（小さなマナーも子どもたちの見本になる）。実習手帳の誤字脱字、文章構成。
- ・給食マナーにとっても気を付けており、先生側も気をつけるし、児童の方にもしっかりと注意しなければならない。
- ・トラブルなどがあれば、無理に止めずに現状維持して他の生徒に先生を呼びに行かせること。生徒のプライバシーを守ること。
- ・生徒への対応を気をつけること。部活指導の方法と生徒のプライバシー保護。
- ・「この実習を通して、存分に子どもたちを感じてください」ということを指導され、そのことを頭に刻んで実習を行った。
- ・子どもの立場で物事を考えること。自分ではできているつもりでも、先生方に注意され改めて考えてみると、そうでもなかったことに気づかされ愕然とした。
- ・子どもの目線になって考えること。自分だったらどのような授業をするか考えること。
- ・生徒との関わり方（自分から話しかけてどんどん交流をしていく）。
- ・失敗を怖がらないこと。
- ・「どうして先生になりたいのか」自分の意見を持っておくことと、笑顔の大切さ。
- ・児童の手本となるような言葉、化粧、服装についての指導。
- ・教壇実習後、もっと子どもと目と目を合わせて授業を進めたほうが良かったといわれました。校長先生からは、「若さは武器になる、オーバーにほめて伸ばすことが大事である」と指導を受けました。
- ・指導しすぎると児童の良さが無くなってしまう。教師には職業上、親切に教えてしまいがちであるが、そこを我慢することが子どもを成長させること。
- ・子どもが主役だから、教師があれこれと口出しをせず、子どもに考えさせること。常にチャレンジする気持ちを忘れないこと。子供を常に見ること。
- ・へき地では、様々なところで地域の方に見られている。子どものお手本としても見られて恥ずかしくない行動を心がけること。子どもたちに手をかけすぎないこと。子どもが自ら考えて行動できるようになるには、見守ることも必要。
- ・できるだけ、子どもたちと積極的に交流することで、みんなが考えていることや悩み、生活の様子などを知ることができた。

- ・給食や掃除の時に、見ているだけではなく、自ら参加し、手伝うことでコミュニケーションが取りやすくなる。質問の仕方も具体的に例を出してから質問すべきだということ。
- ・へき地では、先生は3年ほどで入れ替わってしまうため、行事などに積極的に参加して地域の一員となることが大切だ。そのために言葉遣いにも注意を払い、「**に帰る」という表現は控えたほうがいい。地域の人々に「所詮足止めか」という印象を与えてしまうため。
- ・生徒たちとの関わりを大切にしてほしい。実際に生徒たちとコミュニケーションをとり、その中で生徒たちの良さを見つけて伝えてほしい。
- ・同じ目線で向き合う。教師はあくまでも脇役であり、主役は児童、子どもであること。
- ・子どもたちは外からの風を普段あまり受けないので、はじめはあまり関わろうとしないかもしれないが、飾らないありのままの自分で子どもたちと接してほしい。
- ・へき複研究大会に行ったときは、どんどん前に出て行って参観するように言われた。
- ・失敗するのは当たり前だし、したほうがいい。
- ・とにかく生徒と一緒にいてほしい。短い期間だからこそ生徒と仲良くなってほしい。生徒と触れ合う中で学んでほしい。
- ・授業の見方。これが正解という授業はない。なぜなら授業は生徒で成り立っているため、A組で成功した授業がB組で成功するとは限らない。よって授業では先生を見るのではなく、生徒一人ひとりを見なければならぬ。
- ・自分にできるのか、真似してみようかなと考えることが大事。まず自分に合った授業スタイルを理解し、自分の方法がわかれば、あとは生徒の反応を見てアレンジしていけば、それが双方にとって「良い授業」になる。
- ・楽しく、無理せず、でも力を入れるところは入れて仕事に取り組む。少人数だと毎日同じことの繰り返しだと「慣れ」が出てきてしまうので、毎年新しいことにチャレンジする。先生自身も全力で楽しんでいて、その姿から自分自身も楽しもうとする大切さ。
- ・チョークの持ち方、板書の工夫、説明の仕方やまとめ方など授業の基礎基本を一から教わった。
- ・とにかく積極的に関わっていくこと。何よりも大事なものは「信頼関係を築いていくこと」で部活や地域活動に積極的に参加していくことの重要性を実感した。
- ・授業中の児童への指示、間接指導の準備。先々を読んで指導計画を練ることと実践することの大切さ。
- ・複式の授業方法。子どもに説明する際に、子どもの思考の流れを途切れさせないような指導。
- ・真剣に児童と向き合うこと。指示を明確に出すこと。
- ・「オレ」などの言葉遣いと服装もワイシャツの第一ボタンを開けないなど指導された。毎日の行いが大事であること。
- ・子どもと関わる際に、教師としての関わり方を身につけるよう言われた。
- ・「児童とはフレンドリーであるべきだが、フレンドではない」。しっかりとけじめをつけることが大事だと感じた。
- ・自分から寄ってこない子供に目を向けて関わること。黒板の字をまっすぐ書くこと。打ち合わせは早い時間に済ませること。熱意を教員生活の中で持ち続けること。
- ・「おとなしくしているのではなく、積極的に子どもに関わる」「子供の良さを発見して褒める」
- ・いろいろな角度から子供を見ること。元気いっぱいであること。
- ・児童とたくさん関わり、たくさん吸収すること。

8. 実習校で印象に残った活動、指導の先生の言葉や行動は何ですか

- ・職員会議で校長先生が教諭に対して感謝の言葉が多く見られたり、担任の先生も朝の会、帰りの会で児童の良かったところをしっかりと褒めていたことが印象に残っている。
- ・集合学習に参加できたこと。「自分はこの場合、教師として、何をしなければならぬのか」を常に考えてほしいという言葉。
- ・集合学習で他校の児童と仲良くなろうとする子どもの姿が印象深かった。指導教諭の「自信のない授業をして子供を不安にさせないためにも『ごめんね』を言うてはいけない」という言葉。
- ・集合学習や全校体育など、自分自身が体験したことのない活動。
- ・クラブ活動で先生が本当に厳しく指導しており、その指導を正面から受け止めひたむきに取り組む子どもの姿。先

- 生が子どもと遊ぶ時は本当に楽しそうに遊んでいたこと。
- ・最後の日の別れの集いで子供が泣いてくれたこと。「声に抑揚がなく、印象付けがあまりできていない」と研究授業の反省で言われたこと。
 - ・休み時間や朝、放課後に全校児童が一緒に遊んでいること。高学年が低学年への配慮をしていたこと。
 - ・校長先生の講話で「すべては子どものよりよい成長のために」という言葉。
 - ・学校行事などをみんなで作り上げていくこと。花壇整備も生徒みんなで、特別清掃（自分の教室以外の場所）もみんなで行ってた。ほめると叱るを担当がどのように使い分けしているのかが見えたこと。
 - ・全校授業においては、1～3年生の生徒が音楽や体育を一緒にすること。上下間がとても仲良く、関わり合いが多い分、とても団結力がある。
 - ・コミュニケーションを大事にすること。
 - ・「教師の一番大切な仕事は子供を伸ばすこと」
 - ・「子どもたちの信頼を得るために、小さなことでも子どもたちと一緒に行動することが大切だ」という言葉。
 - ・「休んだ子が困るだろうから家に持って行くんだ！」と子どもの心の豊かさ、思いやりに感動した。小学校の先生の「子どもを思う気持ちは、先生も保護者も同じ」という言葉から、保護者との関係の在り方についても考える機会になった。
 - ・指導教諭の「生徒を理解するためには、いろいろな角度から『見る』ことが大切です。『子供は太鼓だ。大きく叩くと大きく響く。小さく叩くと小さく響く』とよく言われます。深い生徒理解を基に、個に応じた指導／支援をすることで生徒を大きく成長させることができるのです」という言葉。
 - ・音楽発表会や演劇練習。生徒が本気で一生懸命取り組んでいる姿に感動した。先生の「少ない人数でも、君たちには人を感動させる力がある」という言葉。部活動や行事と一緒に参加し本気で取り組む先生の姿。そういった姿勢が、生徒を育ていい影響を与えていくと感じた。
 - ・私がどんなに授業を失敗しても、改善点を示して前向きに物事を考え、指導して下さった先生方のおかげで、失敗を恐れずに挑戦しようと実習に挑むことができた。
 - ・全校合奏の練習。『情熱大陸』を素晴らしいアレンジで演奏していた。
 - ・全校朝の会。校長先生／用務員さんも参加して今日の目標をみんなの前で発表していたこと。「平等にと考えるのではなく、どこが苦手できないのかを見て指導する」という言葉。
 - ・ふれあい集会。そば／うどんづっくりや相撲大会など子どもたちはとても一生懸命で輝いていた。「仕事を優先しすぎず、自分の生活をきちんとする余裕を持つこと。自分の生活がきちんとしていないと、子どもともしっかり関われない」という言葉。
 - ・校長先生講話。グローバル化が進んだ現代では、創造性や独創性といった『自ら思考する』能力が求められているが、従来の日本の教育ではこの能力が養われない。そのために教師は『教育のプロ』として自覚をもち、常に研究し続ける姿勢が大事だという言葉。
 - ・「授業は前で見ろ」
 - ・教員講話の「先生とよく話す生徒は、何かが満たされていない生徒かもしれない」という話。こうやって生徒一人一人のことを考えて、生徒を理解していくのだなと、現場でしか学べないことを学んだ。
 - ・教頭先生の指導。いいところをしっかりと伝えて下さった。自分のいいところはどこなのだろう？とずっと思っていたので、いいところを伝えて下さってとても嬉しかった。
 - ・学校の畑のイモ掘りとトウモロコシ収穫。すべての学校関係者と一緒に、もちろん子どもたちも一緒に活動。「教師を目指すなら何か一つ自分だけの自信を持てる者を持つことが大事」という言葉。
 - ・マラソンでは地域の方々と深いつながり、保育所との深いつながりを感じた。先生が子供たちに負けないくらい元気いっぱいだったのが、強く印象に残っている。
 - ・マラソン大会。6年生の児童とたがいに高めあったのが、とても心に残っている。
 - ・奉仕活動の村のごみ拾い。行き交う人々とあいさつを交わし、本当につながりが強いと感じた。また村のお祭りで、村の団結力や温かさに触れて、素晴らしいと感じた。
 - ・子どもは村の宝という感じ。よく褒めること。「○○のそれ最高だね！」と一人ひとりの名前を呼び、その活動を褒めていた。
 - ・校長先生の「やったことがないからできないというのは、逃げているのと同じだ」という言葉。へき地校では教師

に専門外のことを任せることが多いため、教師にとっても大切な言葉だ。

- ・いかに生徒に自分の言葉で伝えたり、表現するのか、またその大切さについて学ぶことができた。「教えることではなくどう導いてあげるか」「最初の声かけや導入が大事」という言葉。部活動に参加したことで、違った表情も見ることができた。
- ・児童／生徒会。小中学校で15人のため一緒に会議をしていた。小学生にとって中学生の人たちとともに話すというとてもよい機会である。
- ・水泳記録会。多くの保護者が応援に来て、子ども同士が応援し合っていてとてもよい雰囲気だった。
- ・酪農体験。子供たちがどのような環境で過ごしているのかを学ばせていただいた上、保護者の方と教育についてお話しするというとても貴重な経験だった。指導教官に「子どもたちにどのようになってほしいのかなどを考えたら、自然と関わり方も見えてくるはず」というアドバイスをもらい、私は関わり方ばかり気にしていたことに気づけた。
- ・「カナダ学」「地球学」。1年生から英語が話せることに驚いた。先生に「授業の主演は誰かを考えなさい」「自分の素を出しなさい」と言われたこと。
- ・校長先生の「手をかけず、目をかける」というお言葉。低学年が国語の音読を全校児童に聞いてもらう際、1年生は前に立ったままずっと音読せずにいた。その時にだれも助けることもなく、児童が自分で口を開くまで、他のことをしながらも、様子を見ていたこと。
- ・「引き出しをたくさん持つこと」「児童の実態に合わせた指導」「へき地校の児童は本質が見えやすいが、どの子どもも本質は同じである」こと。
- ・君たちには教員としての素質がある!! 素直さ、個性があるといわれ、大切にいなさいという言葉。
- ・子どもたちは先生の緊張を敏感に受け取るので、緊張をしている時でも笑顔を忘れてはいけない。
- ・実習最終日に教頭先生に「あなたは先生に向いています」と言われたこと。
- ・地域の相撲大会。私は希望して参加させていただきました。地域と学校がどのくらい繋がりがいいのかを知ることができた。
- ・自学自習をさせるため、言葉かけは少なくする。
- ・「現場に出ないとわからないことがたくさんある」ということ。先生方はしっかり叱ってしっかり褒めることのできる先生が多かったこと。
- ・校長先生の「少人数授業は教育の原点」「子どもの立場で物事を考え、行動することは、どんなにキャリアを重ねても決して教師が忘れてはいけないこと」というお言葉。へき地校以外でもきっと当てはまることだと思う。忘れずにいたい。
- ・全校または地域全体で何かをしようという活動が多くて、地域の中心になるのが学校であること。先生方がフレンドリーに保護者の方々と触れ合っている影響を受けて、子どもたちも積極的に活動ができているのかなと感じた。
- ・常につきっきりで私に指導してくれたこと。
- ・先生方は皆さん本当に優しく、私が授業前に緊張していると、控室に何名もお越しになり励ましてくれました。
- ・「教師の言葉や雰囲気は子どもにうつる」というのは本当なのだと実感した。
- ・給食のときに、嫌いなものでも必ず一口は食べること。校長先生が「地元の人々は土の人、教師は風の人、実習生は季節風」と言っていたこと。
- ・クラブ活動。高学年が先生からの指示がなくても当たり前のように中学年に指示を出していたこと。そういう姿を見て、下学年は育っていき、立派な高学年になるのだなと思った。
- ・日々の活動の中で、とにかく子供たちが元気いっぱい。とにかく全力でした。何より先生自身がとても明るくいつも笑顔でいて、それにつられて子どもたちも元気に過ごしているのだなと思った。
- ・立会演説会。子どもたち一人ひとりが必死に自分の言葉で自分の考えを話している姿がとても印象的だった。先生方は言葉を選んで子どもたちへ声かけしているのが勉強になった。
- ・一人ひとりの能力に合わせて指導計画を立てることが大事だということを、授業をしてみて実感した。特に苦手な子への対応と同じくらい、得意な子への配慮が大事と先生に言われたこと。授業時間内で指導内容を落としきれなくても、その先の勉強でまた教えるタイミングはあると言っていたこと。
- ・学級内で問題が発生した時に、先生が確実に指導していたこと。一日がかりで生徒に問題について考えさせ、厳しい一面を見せつつも、できたときには本気でほめてあげる優しさも見ることができた。
- ・先生でも苦手だと思っていることがいろいろあるのだということ。担任は時間配分が苦手なタイマーを使いながら

授業を行っていた。先生といえは何でもできるというイメージでしたが、必ずしもそうではないと知ることで少しホッとしました。

- ・生活科の畑仕事。ちょうど野菜の収穫時期で、ミニトマトが嫌いな子が、みんなで収穫したミニトマトを頑張って食べ「おいしい」と言っていたこと。
- ・全校給食。全校で休み時間遊んだり、全校掃除。全校一体という感じ。
- ・先生方の普段の子どもたちとの関わり方。休み時間や給食時間も先生方は基本的に子どもと一緒に。こうやって信頼関係は築いていくのだなあとと思った。
- ・総合的な学習の時間。子どもの自主性を中心とした授業で、地域の特性をフル活用していて、子どもたちの目も輝いていた。
- ・楽しい時でもしかる時は叱る。
- ・地域産業体験。
- ・出会いは何かの縁、そういう縁を大切に下さい、という言葉。
- ・私が先生にはあまり向かない性質であるといわれ、どのように努力したらいいのか具体的に教えてもらえたこと。ちょっとずつの成長でも満足感を得ること。自分が何をしたいのか、心構えをきちんと持つこと。
- ・一日のなかで、絶対に生徒全員と言葉を交わすという言葉と行動。